

あわよくば

2 MARK 勝負

極上のファンサービス、ペアボートを復活させよ

3月号の「探偵局」で「アスリートキャンプ」の様子を調査し、その中でパラアスリートを乗せたペアボートが参加者の間で大好評だった。かつては全国のレース場で行われていたペアボート試乗会だが、近年は全く実施されなくなった。これはファンがケガする事故が発生し、一気に自粛ムードが広がったから。その後のコロナ禍が追い打ちをかけ、調べ得る限り6年以上、レース場で行われていない。

探偵局では、佐藤大介と後藤陽介が「ボート界にとって、ペアボートは大きな武器」と話している。ペアボートを体験したパラアスリートたちは一様に目を輝かせ、その迫力に舌を巻いていた。

かく言う私も1年ぶりに乗せてもらったが、カポックを着てヘルメットをかぶった時からワクワクし、他では味わえない疾走感、水面から見える景色、危険と隣り合わせだから感じるスリル。2周でも足がガクガクするほど体力が奪われるなど、ペアボートは非日常の塊だ。

ペアボートができなくなった代わりにVRスプラッシュユバトルで選手の擬似体験ができるようになった。非常に面白いゲームで、様々なイベントでも遊べる機会が増えている。ボートのことを広くアピールするにはこの上ないコンテンツだといえる

が、やはり本物とは別物だ。パラアスリートには、下半身に障害を抱えている人もいる。ペアボートでは前に乗る人に、取っ手をしっかりと握っておくように言われるが、実際は下半身の踏ん張りも重要。パラアスリートは踏ん張れない分、ドライバーの選手たちは安全運転で旋回する。普段は一発でハンドドルを入れるところも送りハンドドルになるし、あえてターンマークを外すように指導されていたのも印象的だった。

一般ファンのペアボートのレギュレーションもこれでいいのではないだろうか。全速にしても直線の速度は通常の半分程度。それでも水面ストレスを走行し、ほんの少しの波でも、こんなに跳ねるのかとスリルを感じる。旋回を慎重に運転することで少々迫力に欠けようとも、長い人生で数回しか乗る機会がない一般人にとっては、その違いなど分からない。選手にはとにかく安全に運転してもらおう。これを徹底するしかない。

今のルーキーはペアボートを操縦することがない選手がほとんど。あまり長く空白の期間が空くと、せつかくの極上コンテンツが途絶えてしまう。編集部にもいまだにペアボート復活を望む声が届いている。そろそろ本格的に復活を考える時期ではないだろうか。(ウエスギ)